

令和4年度 平島ネズミ駆除計画の概要

1. 目的

近年、生息数が激減しているオガサワラカワラヒワ（以下、オガヒワ）の繁殖地である平島において、ドブネズミによるオガヒワの繁殖阻害リスクを低減し、オガヒワの保全に寄与するため、オガヒワの繁殖期前にドブネズミの生息密度を低減させる。

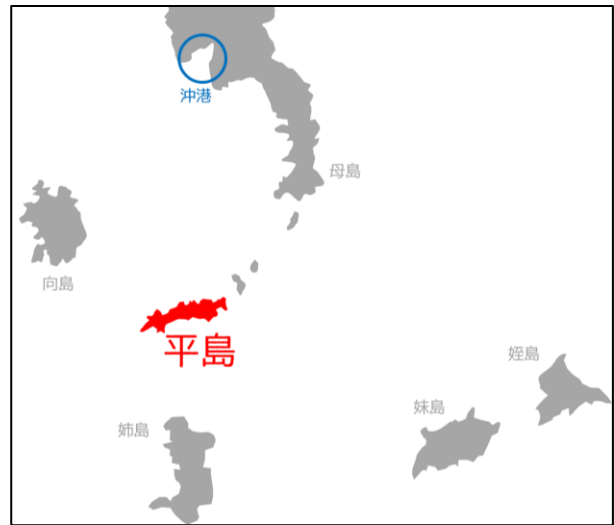


図1 平島の位置図

2. 対象地域 平島（全域60haのうち48.1ha）

※散布作業は全域のうち、アクセスが困難な海食崖や対策効果の低い浜辺を除く

3. 実施期間 令和4年11月から令和5年3月

4. 実施内容

- ・駆除計画の作成及び、その計画をもって地元関係者と調整（漁協への説明・協力依頼、住民説明会）
- ・1回目は殺鼠剤（10g スローパック）の手撒き散布（12月下旬）
→527 ポスト（16 ポスト/ha を目安）に約 800 kg（1.5 kg/ポスト）
- ・2回目は殺鼠剤（粒剤）を入れたベイトステーション（以下、BS）の設置（2月上旬）
→150 ポストに約 75 kg（500 g/ポスト）
- ・保全対象であるオガヒワの調査
 - ①人工水場の近くにセンサーカメラを設置し、散布期間の前後に月1回程度モニタリング
 - ②調査のために定めた島内を周遊するルート上を、散布期間の前後に月1回程度、歩きながら観察
- ・駆除対象であるネズミの調査
：島内にまんべんなくセンサーカメラを設置し、月1回程度モニタリング

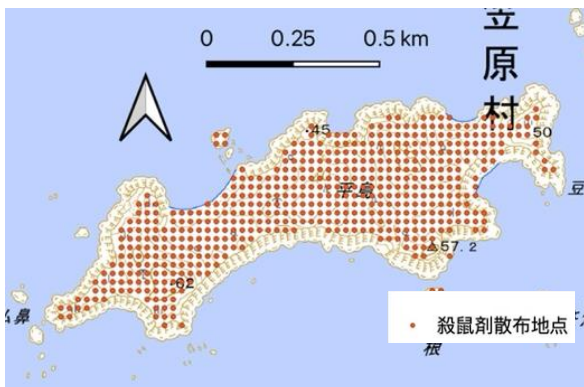


図2 散布ポストの位置図



図3 BSの設置位置図

【使用殺鼠剤】

- ・使用する殺鼠剤の第1世代抗凝血性剤（ダイファシノン）は粒剤中の殺鼠剤成分の濃度が0.005%と低く、残りの成分はほとんど穀物である。ダイファシノンは、ネズミでも複数回食べないと致死しない程度の毒性となっている。
- ・小笠原の他の属島でのネズミ駆除における使用実績があり、他の生き物への影響の検証がされている。



スローパック

【配慮事項】

■散布方法

- ・手撒きによる散布方法はヘリコプターやドローンによる空中散布に比べ、殺鼠剤が海上に流出するリスクが少ない傾向にある。海上流出のリスクを更に下げるため、食崖等の海上流出のリスクが高くなる箇所には散布しない。そして、作業直後に平島周辺の海上を航行し、殺鼠剤の海上流出の点検を行い、流出が確認された場合にはすぐに回収する。
- ・BSによる散布方法は、粒剤の効果が比較的長期間保つことができ、殺鼠剤が野外に散乱しないため、非標的種への影響が少ない。BS設置作業時にも、1回目散布の残存したスローパックの可能な範囲での回収及びスローパックの流出点検を行う。
- ・本作業によってアノールや種、昆虫、プラナリア類などの新たな外来種を持ち込んでしまわないよう、作業や調査等で平島に上陸する際は、衣服や荷物、道具・資材への付着物の有無を確認する、靴底は渡航前に酢酸等で洗浄するなど、予防策を徹底する。



粒剤を充填したBS

■オガヒワ

- ・亜種カワラヒワの殺鼠剤感受性試験から、カワラヒワにはある程度の感受性があるとの結果をふまえ、オガヒワが喫食してしまわないように、散布直前に飛来が確認された際には捕獲・隔離を実施する。
- 殺鼠剤の散布前にオガヒワの平島への飛来が確認された場合の捕獲・向島への再放鳥の体制を整える。捕獲しなかった場合及び散布中は、手撒き散布を中止し、BSの設置に切り替える。
- ・繁殖期にオガヒワが平島に飛来する2ヶ月前には散布を終え、2回目の散布の際にはベイトステーションを用いるなど、残留する殺鼠剤が無いよう、最大限の配慮をする。

■その他の生物

- ・平島にはオガサワラススキの草原が広がっており、それを食草とする固有の蝶類オガサワラセセリも多く生息する。同種の好むエリアには、その卵・幼虫・さなぎがよくいるため、そのエリアをなるべく避けて手撒き散布を行う。
- ・平島内を移動する際は、必要外で作業道を外れないよう注意し、希少植物や陸産貝類、海鳥類の巣穴、カクレイワガニ・オカヤドカリ類等の踏み付けを防止する。
- ・在来の鳥類やオガサワラオオコウモリが殺鼠剤を喫食あるいは二次毒性の影響を受けた場合に備え、解毒剤であるビタミンK1を準備する。

5. 今後の方針

令和5年度は、BSへの殺鼠剤の点検・充填と本事業と同時期の手撒き散布を今年度と同等規模で予定している。BSやセンサーカメラが既に設置されているため、設置に要した作業量等を殺鼠剤の点検・充填に充てる。また、BSが令和5年2月から稼働するため、4月以降のネズミのモニタリング調査も可能な範囲で実施する。

なお、本事業後にネズミの低密度化が確認された場合、オガヒワの平島での生息状況や他島での繁殖状況、非標的種へのネズミ食害の影響等を鑑みながら、環境省をはじめとした他機関とBS設置や追加の手撒き散布など、ネズミ根絶に向けた調整を行う予定である。

また、ネズミはオガヒワだけでなく他の在来生物へも大きな影響を与えており、ネズミ駆除後の他島では、希少植物の実生の増加や甲殻類、トカゲの増加などが見られている。

ただし、駆除剤を散布し、一時的に密度低下した後、ネズミが再び増加することも想定する必要があるが、散布期間中にオガヒワの飛来が確認されると、その後の駆除計画が大きく変更されるため、現時点では明確な方針を示すことができない。

さらに、オガヒワの生息状況については、長期的なモニタリングを継続する必要があることから、林野庁をはじめとした他機関と調整を行う予定である。